

# 京町家通信

KYOMACHIYA PRESS  
vol.117

京町家通信 第117号 2018年3月1日発行  
特定非営利活動法人 京町家再生研究会  
一般社団法人 京町家作事組  
京町家友の会  
京町家情報センター  
ホームページ<http://www.kyomachiya.net/>

## 巻頭言 ● 設計塾の現場から

昨年 10 月に再生研の設計塾が開講された。現在、全 7 回の講義のうち 6 回を終了したところである。筆者は公的機関で団地や再開発の住宅設計などに長い間関わったことがあるが、今は木造の町家に興味を持って居住実験を含めて勉強中である。設計塾の世話役という立場で昨年の初夏からこの企画に関わってきた。

本稿では、設計塾の企画から現在に至るまで、現場を通じて感じ取ったこと及び設計塾の進捗状況について紹介することとしたい。

まず設計塾開設の動機について。

それは、昨今の改修設計には、あるべき姿勢や、配慮が欠けているものが多いのではないかという危機感に困っている。では何が欠けているのか。二つの視点から問題とされる改修設計を取り上げてみる。

一点目。京町家の保全・継承は、自然との関わり、まちとの関わり、住む人との関わりなど大切に受け継がれてきた生活文化を継承することに大きな意義がある。にも拘らず、生活文化と密接に関わる京町家の形や意味をわきまえていないと考えられる改修設計が見受けられる。たとえば、山鉾巡行の通りに沿道緑化と称して中木を植栽するという設計、茶室の配置や床の間の真行草の使い分けが不確かな設計など。

二点目。京町家の改修の基本は、現状調査に基づき「復原」に向けての考察を行い、現代的な暮らしや使い方の要求に対応しながら、その町家の昔ながらの姿を効果的によみがえらせることにある。にも拘らず、「復原」への姿勢が見られず、さらには、将来的にも復原を困難にするほど致命的な改変が行われる場合がある。たとえば、根拠の不確かなファサードの改修設計や主要な通し柱の切断など。

このような“分かっていない”“残念な”改修設計は、せっかく再生のための投資が行われ、その京町家を健全な姿によみがえらせる機会をみすみす失ってしまうことになる。再生研の目指す京町家の保全・継承の姿とは違う方向であり、むしろ妨げになってしまう。

こうした危機感は、量的なデータに基づくものではないが、重要な問題提起となっている。

ではどうするか。設計者に基礎的な知識がないことが大きな要因の一つではないか。設計者に、あるべき姿を伝えるべきである。再生研には伝えたいことがあり、伝える力がある。

だから設計に携わる人たちと直接に接して伝えることのできる場として設計塾を始めよう。さらに講義の内容を取りまとめて京町家改修のテキストとすることも検討しよう。

以上が、設計塾開設の主な動機であったと捉えている。そして、設計塾の対象としたのは、京町家の伝統的な形に仕事を通じても生活の中でも実地に触れる機会が少なく、習得する場が見当たらない現状にあると考えられる若手の設計者や学生である。彼らに、京町家の本来のあり方、伝統的な形やその意味を伝える場を設けることを設計塾の開設趣旨とした。

8 月に募集を行ったところ、定員を超える 20 名の塾生が集まった。以下では、各回の講義について簡単に紹介しておきたい。

初回は、木下龍一氏と野間光輪子氏の対談（コーディネーターは小島理事長）。豊富な設計経験をお持ちのお二人から、釜座町町家やセカンドハウスなど実体験に基づく説得力のあるお話が次々と飛び出し、刺激的で楽しい対談となった。若い設計者へのアドバイスとして、「空間を経験しなさい。」「町家だけではなく社寺や茶室など良いものをたくさん見なさい。」「とにかく見る眼を養いなさい。」ということが強調された。

第 2 回から第 4 回では、「京町家の基本（1）形の意味」「京町家の基本（2）素材と工法」「改修設計の基本」の講義を実施し、第 2 回の講義後には小島家内部の見学の機会を持った。

第 5 回の現地見学では、「良いものを見る」の趣旨に則って、大徳寺を訪れ、千利休の菩提寺聚光院と一休禅師の真珠庵を見学した。友の会会員でもある京都工芸繊維大学の矢ヶ崎善太郎先生を講師に迎え、同行していただき、庭玉軒など茶室についてのご説明をじっくりと伺うことができた。

第 6 回と第 7 回は実測調査と活用提案の設計演習である。所有者さんのご好意で、表通り沿いと裏路地沿いに多様な形態の長屋が 8 軒建ち並ぶ現場で、群としての町家の活用を検討できる格好の題材を選ぶことができた。第 6 回の雨の中の実測調査を終えて、最終となる第 7 回目は、提案発表と講評を行う予定である。半年間にわたった講座の集大成であり、双方にとって収穫のある場となることを期待している。

<網野 正観（京町家再生研究会）>

## 論考 ● 町家をひとくくりにして考えない—大工から設計者に伝えたいこと

第3回設計塾では、釜座町町家で、改修設計の基本をテーマに木下龍一さんが解説したあと、大下尚平さんが大工として設計者に伝えたいことをお話ししてくださいました。大下さんは京町家作事組が開催している棟梁塾の第1期生であり、その体験も踏まえて、若い人たちにとても丁寧に語ってくださいました。町家再生に対峙する基本的な姿勢が明確に打ち出されており、スタッフもいろいろと考えさせられました。実りの多いひとときでしたので、その様子を再構成してお届けします。町家再生にとって大事なことはなにか、現場の気持ちをお聞きください。

### ● わからないから学ぶ

棟梁塾に参加するきっかけは、私が大工見習から少し成長して、町家改修の現場に携る機会が巡ってきたとき、町家の構造が現代の木造の建物と違うことに驚くとともに、改修の方法もまた違うのではないだろうかと疑問を持ったからです。職業訓練校で学んだことと、実際の町家の現場は違いました。どうやってなおしたらいいのかを学びたくて入塾し、2年間学び、その後さらに2年、町家改修の経験が豊富な大工さんのもとで学びました。

### ● 釜座町町家の再生

釜座町町家再生プロジェクトの目的の一つが若手育成でもあり、多くの棟梁塾1期生が力を発揮しました。現場で学ぶことはかけがえのない経験でした。

町家をなおす時は調査から入ります。町家は長い年月のあいだに増改築が加えられ、本来の姿から形を変えている場合がほとんどですが、その場合どう改修するのか判断が難しくなります。釜座町町家の場合、柱の沈下が最大12センチもありました。柱の根元が腐っていて宙に浮いているところもありました。足元が下がると全体も歪んできます。釜座町家の場合、大黒柱を基準にジャッキアップや、歪み突き、場所によりワイヤーで引っ張るなど、できる限り普請されたときの状態へ構造を戻していきます。隣家との関係でどうしても触ることのできない場合も多くあります。また厳密にミリ単位で戻すと辻褄が合わないこともあります。普請時も1分や2分くらいは大目に見ていたのだと思います。

### ● 答えは目の前にある

町家には決まりごとが多いので、たくさん町家を見てなおしていけば、ルールがわかってきます。原状は違った形になっても、順にほどいていけば、町家には痕跡が必ず残っています。釜座町町家では尾垂廂の復元が話題になりますが、アリ束の痕やほぞ穴など、大事なところは現場の痕跡に答えがあるものです。構わずにバツサリ壊してしまうとわからないままになってしまいます。だから丁寧にほどいていかなければなりません。また、シロアリの入った痕があれば、雨漏りはないか、排水が漏れていないかなど、シロアリの好む条件から原因をつきとめ、改善しなければなりません。湿気の原因には現代的な理由が影響していることが多いようです。

### ● 順番を間違えない

構造と屋根をなおさないと元も子もなくなります。何が大切なのか、順番を間違えてはいけません。あとで構造をなおすことはできませんから、最初に構造をきちんとなおさないといけないのです。

町家をなおすと坪単価では高いといいますが、おしなべて考えてはいけません。まずやらないといけないこと、お金をかけてもなおすべきところがあり、そちらを優先しなければなりません。設備やしつらえなど後回しにできることは調整すれば良いのです。

### ● 学び続ける

釜座町町家のとき、一番難しかったのは炉の切り方でした。茶室のことがわからなかったからです。現場が終わってからほどなくして、私は茶道を習うことにしました。

大工が道具の扱い方を知らなければ建物をなおせないように、茶室のしつらえがわかっていなかったら、茶室を触らせてもらえません。以前の現場でも、茶室は別の大工さんが入るということがあり、残念だったのです。

現在らくたびさんが入居している旧村西邸を改修した時は、真行草の床、お茶室、庭などいろいろな要素があつてとてもおもしろかったです。茶道を学ぶのと同じように、陰陽や五行などの思想を理解して考えながら仕事をしないと筋を外してしまうことがあります。再生に関わるからには、わからないことを常に学び続ける姿勢が大事になります。改修現場から学ぶことも多くあります。

### 「次の大工が困ることはしない」

質疑応答も含めて、大下さんがこの講義で何度も発したのが、この言葉です。現時点の個人的な判断で無理をしてはいけないという意味でしょうか。現代的な仕組みや施主の要望により、いろいろな変更を加えるとしても、絶対やってはいけないことは「次の大工が困ることをしない」という基準です。この言葉には、次の世代にまたこの町家をきちんとなおしてもらいたい、という思いが込められているようです。今、私たちが関わっている「再生」は、次の時代に引き継ぐための使命なのです。

そしてもう一つ、「町家はひとくくりではない」という言葉も何度も繰り返されました。長屋から大店、また洋や数寄までさまざまな町家があり、それぞれの家に施主のこだわりがあります。その町家の魅力を施主にきちんと伝えること。町家の欠点もきちんと報告すること。そのようにして町家の全体を考えることが必要なのです。大下さんの再生への意欲が若い受講生にも伝わったのでしょうか。

この日、もう一つ印象的だったのは、歪み突きの説明で、木下さんが「あるときふわっと全体が戻ることを感じるときがある」という言葉でした。このような「息を吹き返す」瞬間を感じられるからこそ、きちんと「再生」したいという気持ちが強くなるのでしょうか。この感覚をより多くの人たちに感じてほしい、というのが設計塾を支えているスタッフの願いです。

お話 大下尚平（京町家作事組）  
文責 丹羽結花（京町家再生研究会）  
協力 森珠恵（京町家作事組）



## 再生の試み ● 上七軒の町家

再生研1月例会では、設計塾の塾生も参加して、いっしょに上七軒を訪れました。北野天満宮におまいりして、網野さんのご自宅を訪問し、再生研の会員でもある黒竹節人さんのお店「くろすけ」で新年会を開きました。当日は、黒竹さんが紋付はかまでお迎え。開始時間に行き違いがあったため、お待たせしてしまったこともあり、恐縮しながら、2階に上がりました。2部屋をつなげた座敷のぐるりにお膳が並んでおり、久しぶりに町家らしい宴会。お正月らしく華やかなひとときを過ごすことができました。

はじめに黒竹さんから「くろすけ」の改修と昨今の上七軒について、お話をいただきました。

「くろすけ」は明治初年に建てられたお茶屋を13年前に改修したものです。新年会の場所は舞妓さんたちの日常過ごしていたところだそうで、浅黄色の壁はこの空間が非日常であることを語っています。「上七軒の雰囲気をきちんと残しながら、大事なことを伝えていきたい」そういう思いで改装したそうです。めくって見たらこんな色の壁が出てきたので、花街らしい色合いに再現されました。

上七軒ではお茶屋さんや飲食店で「匠会」を結成、「あまり行き過ぎないようにしよう」という申し合わせがあるそうです。上七軒もこの10年ほどで随分と変わってきました。大きなお茶屋やお店も閉じるところが次々と出てきます。人手に渡るとこれまでのスタイルが変わってしまいます。住宅に変わってしまうと表が駐車場になってしまい、町並みにも違和感が生じます。できれば新しい店舗として引き継ぎ、和やかに溶け込むような町並みを維持しながら、中に入るとそれぞれのにぎわいがある、そんなまちづくりにみなさんで取り組んでいるそうです。北野天満宮や歌舞練場と一緒に、風情を残しながらにぎわいを作ろうとしています。

黒竹さんのお話の後には、美味しい料理（ずいぶんサービスしていただきました）と昼からアルコールで、設計塾の受講生同士の交流はもちろん、スタッフとも打ち解けて、なかなかひとときを過ごすことができました。

お開きのあと、大きなおまけが！「せっかくなので、もう一つ」と、黒竹さんがホテル旅館「億」に案内してくださったのです。多くの方がよくご存知だったレストランが閉店、残された大型町家を3年前に黒竹さんが引き取り、高級町家ホテルに改修されました。1泊15万円もするお部屋もあるのですが、海外の方々は連泊されることも多いとか。一体その秘密はどこにあるのでしょうか。

表はしっかりとした町家の風情です。入り口を入ると東側

はワインバーになっていて、宿泊者でなくとも利用することができます。西側にはフロント、クロークがきちんとあり、スーツを着た女性に対応していただきます。とてもゴージャス、まさにホテル！廊下や階段はいかにも現代風で、扉にはキーがついていて、セキュリティがしっかりしています。

特別にこの日空いていたお部屋を次々と見せていただきました。共有部分に「町家」らしさは見られませんが、お部屋に入るとなんと広々とした感じ。個性的なお風呂やふかふかしたベッド、モダンなしつらえなどが、部屋ごとに雰囲気を違って展開しています。畳との組み合わせや天井の高さとのバランスなどもいくつかバリエーションがあります。しつらえもさまざま。お食事をお部屋でとることもできますし、舞妓さんをお呼びすることもできます。

高級旅館のような至れり尽くせりはしんどい、ゆっくりシンプルに泊まりたい、でも和風がいい、という方々にとっては自由にくつろげる、とてもステキな場所です。黒竹さんは祇園にももう一つ同様の高級町家ホテルを手掛けており、こちらも人気だそうです。

一般的な町家のゲストハウスとは大きく違うことがわかりでしょうか。大型町家ならではの活用として、こういうのもあるのだなあ、と思いました。若い人たちにはちょっと刺激的なところもあったようですが、同じお茶屋の改修事例2つを見ることができ、比べることもできたようです。どんなふう感じたでしょう？

思い起こせば、第2回町家再生交流会でさんざん苦労した上七軒でした。3年前に電柱を無くして石畳風にした道もなんだかさっぱりして、気持ちの良いところになっています。京都の落ち着いた花街として、多くの方がゆっくり過ごしていただけるまちになっています。そして、そのために努力しているみなさんがおられることは、大いに励みになりました。

<丹羽 結花（京町家再生研究会）>



## 歳時記 ◎ あずきがゆの会

1月15日は小正月、あずきがゆをいただきます。

あずきは厄よけ、様々なときに口にしますが、お正月をしめくるものとして京都では15日の朝にあずきがゆをいただきます。

友の会ではすこし遅い目の21日にあずきがゆの会を催しました。町家のお座敷は寒いのが名物。どうしたものかと案じておりましたが、みなさんにお入りいただくとほんのりあたたか、やはりたくさんの人が集まるのは家にとっても幸せなことと実感しました。(今年の冬は本当に寒く、あたたためても、あたたためても小人数では寒々としたお正月でしたので)

あずきがゆの会ではもちろん「あずきがゆ」、それだけでは殺風景なので彩りとして、「だし巻」「水菜のお漬物」を準備しました。お家によってあずきがゆもさまざま。お米だけでたところ、お餅をいれるところ、そのお餅も焼いていれる、そのままおかゆといっしょに炊くところ、みなさんからもいろいろなお話をうかがいました。

祝い箸の使い方もそれぞれのお家によって違うと思いますが、我が家では、元旦の朝から使う祝い箸を15日の朝のあずきがゆまでとしており、この祝い箸を普段のお箸にもちかえたとき、「やれやれお正月もおしまい」というなんだかほっとした気に毎年なります。今回お箸紙は使いませんでした。お箸紙は年末に家族それぞれの名前を当主が書きお仏壇もしくは神棚にそなえておきます。お正月中はそのお箸を使い続けます。いつまで使うのかはお家によってこれも違うのだらうと思っています。

元旦から三が日はお雑煮、7日の七草がゆ、15日のあずきがゆ、そのほかにもお正月にはさまざまな「きまりもの」の食があります。縁起物、日持ちのするように、健康で無事に過ごせるようにとの祈りや理由がこめられた本来のお正月の食の風景、大事にしたいと思っています。

2月は節分のいわし、初午のおいなりさんと畑菜のからしあえ。3月はおひなさん、ちらし寿司と赤貝のてっぱい(ぬた)、身じみみの炊いたもの、笹がれい。

季節の巡りと食は密接な関係をもって私たちを楽しませてくれるようです。

＜小島 富佐江（京町家友の会）＞





## 報告 ● 京町家研修会の企画

昨年秋、ホームページ「京町家 net」をご覧になった株式会社ルミネ荻窪店の営業担当者からお電話があり、京町家研修会を企画することになりました。ルミネ荻窪店は JR 中央本線荻窪駅に直結している 8 階建てのショッピングモールです。ショップづくりを考える店長さんたちを対象にした企業研修を実施したいとのこと。近年、町家や古民家を活用した店舗が京都だけでなく日本全国で増加傾向にあり、京町家でどのように商いをされているのか、視察することで研修につなげたいということでした。建築やまちづくり関係でなく、京町家のファンというくくりでもない方々に、どのように京町家についてご案内をすべきか、再生研の事務局も手探りの状態でした。担当者とメールや電話で何度もやりとりを重ね、東京から日帰りの研修会を 2 回行うことになりました。

京町家ならではの店の構え方、商品の陳列の仕方、商売の仕方などを歴史や文化の面で学んでいただくことを目的に設定し、①京町家の歴史・成り立ちと、京町家再生研究会が改修した京町家の改修事例を説明するセミナー、②京町家活用店舗の見学会の 2 本仕立てで、まる一日かけて京町家を堪能していただくことにしました。

1 グループ 25 人程度、それぞれ同じ内容で一日間の研修を行うためには、課題がいくつもありました。30 人程度という人数が一つのネックになりました。セミナーを開催できるような町家、みなさんで食事をとっていただく会場、視察先としても一度に入れるような町家の店舗というのは規模として難しいところです。また、別の日に同じ会場を用意するのも難しいことでした。東京とは地理的な感覚も異なり、それぞれの場所をつなぎながら、先方のリクエストにお応えするのは、なかなか大変でした。再生研、友の会関係者や改修先などのご協力を得て、視察先の町家を用意、改修など関わった担当者が現場で解説することになりました。

試行錯誤のなか、光が見えてきたのは、3 人の担当者が実際に下見に来られたことでした。事務局 3 人と一緒に予定している町家を回りながら、一緒に食事をしている間、小島理事長の町家で暮らすという考え方に共鳴され、「そのお話を是非参加者にして欲しい！」ということになりました。やはり、町家に実際に関わる人々と交流することが一番だと感じました。

1 月 30 日と 2 月 7 日の両日、無事実施することができ

ました。今回お見えになったのは、アパレルから飲食まで様々な業種のテナントの店長さんや店員さん、荻窪店全体の店舗の在り方をデザインされている営業の皆さん、合計 50 名余りの方々です。みなさんから熱心な質問もあり、訪問先の京町家の所有者さんや店舗の店員さんのご理解もあり、またうれしいことに私たちの熱意も伝わって、実り多い研修会になったのではと思っています。

今後も、京町家に関心をもっておられる方はもちろん、これまで京町家とご縁がなかった方々にも、ひろく京町家の魅力を発信できるような研修会を企画していきますので、ご要望などございましたら、是非お知らせください。

＜惣司 めぐみ（京町家友の会）＞

### ● 実施概要 プログラム

#### 〈2018 年 1 月 30 日〉

- |            |             |                                      |
|------------|-------------|--------------------------------------|
| * セミナー     | 京町家の基本      | ちおん舎にて<br>木下龍一                       |
| * 町歩き案内／昼食 | レストラン菊水にてお話 | 小島富佐江、他                              |
| * 京町家の改修店舗 | ホブソنزカフェ    | 内田康博<br>ぜにや<br>木下龍一<br>天狼院書店<br>南麻衣子 |

#### 〈2018 年 2 月 7 日〉

- |            |             |                                      |
|------------|-------------|--------------------------------------|
| * セミナー     | 京町家の基本      | 寺田綾り／船鉾町会所にて<br>木下龍一                 |
| * 町歩き案内／昼食 | レストラン菊水にてお話 | 小島富佐江、他                              |
| * 京町家の改修店舗 | ホブソنزカフェ    | 内田康博<br>望月<br>野間光輪子<br>天狼院書店<br>南麻衣子 |

スタッフ：露木理也子、惣司めぐみ、丹羽結花



セミナー ちおん舎にて



天狼院書店



ホブソنزカフェ



望月

## 改修事例 ● 復旧へのこだわりと新規活用を目指した町家の改修

＊＊区 東山Yd邸

設計：末川協建築設計事務所 / 施工：辻工務店

2016 年 4 月末にご相談に出向いた三条東山の町家。見慣れた建物で、それもそのはず、8 年前に同じ三条通の大手のあずきやの女将さんの主屋の復元改修設計の際、参考にこっそりと出格子の実測をさせて頂いた町家だった。初めて建物に入らせて頂けた。16 年間空き家だったという間口 4 間の立派な町家は、お道具がいっぱい、その前栽も庭木がいっぱいに、すくすくと育っていた。2 階のお座敷は本床付きの 10 畳間、そのオモテは 4.5 畳、6 畳が並ぶ。ジャングルのような庭にある加茂のマクロ石の見たこともないでかい景石、天保 8 年に東海道（すなわち三条通）に立てられた道標、16m を超える黒松の巨木、三尊像を模した、これまた巨大な石組など、近世末から近代までの歴史が詰まっていた。

依頼者である Yd 邸のお嬢さんは、日本画のご専門、いつも真剣で、ご自身の判断や価値観に自負を持っておられ、そして他人の発言にも注意深く耳を傾ける。町家を残したい思いは十分に伝わり、ご両親を説得し、賃借の検討や単体指定も含めたサポートも望んでおられた。お嬢さんの御祖父が京都帝大の医学部を卒業後、産科医院を始めるために購入された町家である。隣のデイケアセンターの敷地にあった旅館に付属のお料理座敷用の町家だったそうである（ちなみにかつての旅館は「鬼平」こと長谷川平蔵の御用達、三条白川「津國屋」のモデルとも）。

ともかく、最初の相談では、調査実測の前に敷地内の伐採とお道具の片付けから始めましょう、と 5 月の連休明けから庭木切り、おっかけ 6 月の初めから不要な家財の処分に取り組んで頂けた。その間、先述のあずきやの女将にも戦前木造の改修の成果を、いつもながら気さくに御案内頂き、お母様にも今日的な町家改修へのご理解を求めた。

そして 6 月中旬、ようやく片付いた町家の実測調査へ。工事担当の辻親方とレベルと倒れの実測。沈下の max は 16 センチあっても、大黒柱のイガミは東西南北とも 0。いつもながら大手の町家の神懸った構造に思い至る。調査で分かったことは、昭和初年の三条通拡張の際、元の明治の町家の 1 階座敷とハシリニワ、火袋を残しながら、1 階のオモテ半分と 2 階に、昭和初期型の町家が覆いかぶさって建てられていること。三条通のかつての幅員を考えれば、オモテから 3 連の奥行きを持つ町家だったこと。付属の水廻りも同じ昭和初めの築造、その奥には蔵や納屋の明治期の建物が残る。蔵は長年の雨漏りで外壁も屋根もかなり傷んでいる模様、しかし近年の工事ですっかりした置屋根が架けられていた。

8 月初めに構造と外装の改修費用の概算提出。同時に京町家情報センターの協力を得て、賃料の想定。改修費用は 10 年を待たずに回収できる見込み。店子には宿泊施設の希望者が早々に名乗りを上げた。そして設計契約後、実施設計と内

訳を作成した 12 月。お嬢さんから連絡があり、自己活用に変更したいと（都ハウジングさん済みません）。おっかけ内装設計、設備設計が追加された。元の町家への復元が原則であり、お嬢さんは新建材の耐用年数に根本的な疑問を持っておられた。元の本瓦が残されており、蔵の改修も工事に含めると決心された。

年を越し 2017 年 2 月に工事開始。急ぎの西隣の焼杉板の貼替のため、西側の揚げ前を先行。1 階の座敷には 2 間一枚、間中幅の松の床板があり、揚げ前時には、それを活かして床柱をコボつ設計だった。根性を決めた大工が床下に潜り込んで 8 センチの揚げ前を成し遂げ、そのままの床の間を守った。施主であるお母様、お嬢さんには工事中の四条町会所の見学にも出向いて頂き、林理事長からも丁寧な対応頂き感謝する次第。また、亀岡の Uh 邸からも戦前の建具を支給頂き感謝する次第。想定外の工事では、同じ敷地内の別宅の土管のツマリと蔵の土壁の駄々傷み。蔵外壁の鉄板をはがすと四方の台輪が崩壊している状況だった。追加の工事費用もお嬢さんのこだわりにより即断即決。1 階のお座敷の床下からは炉を切った跡と、掘り炬燵の跡が同時に現れ、それらの復元も追加工事に。炉壇は平楽寺書店さんのお座敷から支給頂き、重ねて感謝する次第。工期にも余裕を頂き、祇園祭までに主屋工事完了。奥の蔵と納屋の改修は時代祭までお時間を頂けた。

果たして 10 月に竣工引き渡し。三条通を見降ろす 2 階のオモテの格子を外し、時代祭の見物で、竣工お披露目のご案内を頂戴した。残念ながら昨年の時代祭は台風でキャンセル、1 年後の秋の楽しみとなった。御引渡しから 3 か月、今年の初めには大宇陀のボランティアガイドさん達の町家見学を受け入れて頂いた。きっちり直った外観と、元の町家のまま改修した内観に、写真撮影の舞台としての問い合わせが続いているそう。この報告記事の出る前、2 月にはお母様の作品展でギャラリーとしてのお披露目を企画されている。近年画廊の店仕舞いが続く三条東山で、歴史の詰まった町家のまま、真新しいギャラリーが賑わいますよう。

＜末川 協（作事組設計担当理事）＞



黒松の巨木越しに蔵を望む



三条通に面した外観



明治期の火袋



## 町家再生再訪 その11 ◎ 今井邸〈三条油小路町〉（設計：クカニア 施工：アラキ工務店）

2008年（平成20年）12月竣工の今井邸で、お母様と三人のお子さんと暮らす今井雅美さんにお話を伺いました。

ー現在の町家にお住まいになられた経緯をおしえてください。

この家は、曾祖父が明治39年購入した家で、母が生まれ育った家です。今回、改修した時に、作事組の荒木さんから、江戸末期から明治初期に建てられた可能性があると言いました。曾祖父、祖父、叔父がここで悉皆屋をしていました。私は小さい頃から遊びに来ていましたし、学生時代には2階に住んでいました。結婚してからもよく家族と泊りがけで来ていました。叔父が亡くなり、一人で家を守っていた叔母が亡くなり、2006年に譲り受けました。昔から、ぼんやりと自分がいずれこの家に住むことになるのかなと感じてはいました。

ー2008年の改修工事はいかがでしたか

町家というものをよく知らなかったため、自分でもいろいろ調べ、担当の荒木さんにも質問して、この家を理解してきました。その中で、我が家は文化財になるような高級な町家ではなく「中くらの家」と捉えることが出来ました。木材や畳なども「中くらの家」にあうようなものを選んでもらい、基本的には、歪みを直し、壁など見えないところに費用をきちんとかけることになりました。いろんな提案をもらい、何度も設計図や見積もりを書き換えてもらいました。周囲の家は建て替えられ、道路は何度も舗装されましたが、我が家は百数十年建ったままでした。そのため、敷地自体が周囲より低くなったので、地盤を30cmほど高くしました。その分、上がり框が低くなり、上がり下りがしやすくなりました。床下が狭くなりましたが、風通しもまったく問題ありません。

構造面では、キッチンと座敷の間の通し柱が昔の改修で切られていたので、荒木さんがうまく胴差しを入れて下さり、柱を継ぎ足して2階の床と壁と屋根を支えています。ダイドコと通り庭のあいだの建具を取り払って、ひと続きのリビングルームとしています。それ以外はほとんどそのままです。介護が必要になっても暮らしやすいようにトイレと浴室を広くし、床全体をバリアフリーにしました。

火袋は、上の壁まで漆喰を全部塗り替えて貰いましたが、中蔵の福井さんがとても丁寧な仕事をしてくださいました。写真の薪ストーブの設置場所には井戸引きがあり、設計段階で井戸引きを漆喰で塗り込める案がありました。私は井戸引きが見えなくなることを残念に思いましたので、調べて遮熱板を間に置くことで解決しました。井戸引きは今もその存在を誇示しています。また、中蔵さんは漆喰壁が熱くなるのを心配していましたが、周辺の漆喰壁は少し熱くなりはしますが、10年経ってもほとんど変わりなく、きれいなままで問題なく保たれています。

ー現在の暮らしはいかがでしょうか。まずは気になる薪ストーブの初期費用とランニングコストをおしえてください。

薪ストーブの初期費用は煙の出ない煙突をつけて130万円程でした。薪は1シーズン2t届けてもらって年間15万円くらい。でもこれ一つで全館暖房になり、二階は暑いくらいです。これは趣味のようなものだから多少費用がかかってもよいと考えています。

夏などは、火袋の天窓の下はとても暑くなりますが、塗られた火袋の漆喰を眺めて、きれいだなと悦に入っています。ただ掃除が大変です。もともと町家は、商家で女中さんや丁稚さんがいて、家族もたくさんいることで管理が成り立っていたと思います。フルタイムで外で働いている私は、舞良戸の棧の埃も表の格子の汚れを横目で見、休養を優先しています。掃除、たいへんです。

ー町家の継承についてお考えをお聞かせください。

町家に住むのは贅沢になりつつありますね。人が住んでこそその町家と思いますが。町家は建具で仕切られていて、空間がフレキシブルな反面、プライベートがありませんので、今後息子が結婚してここにお嫁さんと一緒に住むというのは、難しいかもしれません。

この家は私の名義だけど、私個人のものではないと子供達には言っています。例えこの家を手放すことになったとしても、100年経っても、残すべき建物として次に継承していける家と思っています。一方で、京都の通りにある町家が壊されるのを見て、一体京都をどうするつもりなのかといつも思っています。ギオンコーナーに行かないと町家が見られないような京都になったら、京都ではなくなってしまうが。



ストーブの前で今井さんの愛猫がしばらくじっとこちらを見つめていました。1年前に動物愛護センターで出会ったときは皮膚の病気だったけど、療養食で治ったそうです。

（取材・構成：京町家作事組事務局 森珠恵）

## interview — 京町家に移り住んで◎ M様宅

聞き手：水口貴之 (51Action)

松原御幸町。いわゆる田の字エリア、と呼ばれるほど京都の中心地に、「あけびわ路地」という5連棟の町家が綺麗に並んでいます。今回は、京都のご出身でありながら東京でもお仕事をされているM様に町家での生活をお伺いしてきました。

◎ Mさんが京都に来ることになった理由を教えてください。

もともと私は京都の出身で、上賀茂神社に近い、歴史としきたりに守られた様なエリアで育ちました。京都を離れて東京で仕事をする様になりしばらく経ったのですが、この度、東京と京都の2拠点で仕事を進めていくことになり、東京に加えて京都でも家を探すことになりました。

◎ 町家に住まれるきっかけを教えてください。

京都で住む、となった場合、自分の実家も和風建築なので、やはり木造がマンションのコンクリートよりも落ち着くので、ある程度アクセスの良い場所で町家を探していました。また、京都では伝統工芸や歴史と関わりのある事業も展開していくことになっていたのも、やはり関連性からいっても町家が良いかと思いました。そこで、今回いくつか物件を見て回ったのですが、このあけびわ路地の町家が一番手入れが行き届いていて。改装されていたのですが、その改装の内容がしっかりと町家の良さを活かすようにされていたので気に入りました。また大家さんの人柄にも惹かれました。さらに、繁華街からも近いし、阪急の烏丸と河原町、京阪の清水五条、と主要な3つの駅からのアクセスがいいというのでこの場所にしました。

◎ 実際に住んでみていかがですか？

思った通りの生活ができていますね。坪庭や土壁が気に入っています。友人が訪ねてくることもあるのですが、京都のこんな街中で、手入れの行き届いた5連棟の町家が突如として現れる町家がずらっと並んでいる外観にも、大変喜んでくれます。畳の感触や床の間、縁側を活用できるところが本当に京町家でしか味わえないですね。実は火鉢に炭を入れて坪庭を眺めるのが日課になっています(笑)。反対になんとかしたいなと思うところは、、、隙間風ですね。。建具で外と室内を仕切っているので仕方がないのですが、

◎ 京町家を探されている方に何かアドバイスはございますでしょうか？

やはり不動産会社とのコミュニケーションは大事ですね。あとはきになる物件があれば、大家さんや周りの人の雰囲気を見てみます。挨拶などの声がけをしてみて反応を見てみるのはエリアや物件の雰囲気を知れるのでオススメです。

今回は、複数の拠点で暮らしを営んでいるM様にお話を伺いました。お住まいになられているあけびわ路地は、路地の手間に3棟と路地奥に6棟とまとまって京町家が保全されている場所です。マンションなどが乱立する一等地エリアの中でこの様にまとまった町家保存をされている大家様には本当に感謝しかありません。これからも町家を町家として活用し保全する、このような活用が増えていってほしいと思います。



### ◎事務局覚え書き

今回2回目となる「3月8日は町家の日」。3月3日～11日にかけて京都市内各エリアの町家にて様々なイベントが行われました。鍾馗さん作り・漆喰壁塗体験など町家に関連したワークショップや、日本茶や作家さん・音楽などとコラボしたものなど、自由に企画していただきました。今回は新たにご参加いただいた町家の方もたくさんありましたし、姫路の町家再生塾にも飛び火しイベントを行っていただいたりと広がりをみせました。これがまた次回は全国の色々な町家地域に広がり、全国的に自由に盛り上がっていき、町家を楽しみ・感じ・考える日になっていけばと思います。今後ともご協力お願い致します。

< 京町家情報センター事務局 城幸央 >

オーナー登録数：延232

ユーザー登録数：延1706

物件登録数：延1706

成約件数：延218

(2018年2月1日現在)